



人と出会う、本と出会う

大いなる《探究者》— ブルーノ・ムナーリ

造形教育研究家 いわさき きよし
岩崎 清



「円」は、いろいろな形態の中で最も美しく力強い形態だといわれている。美学者や芸術家、あるいは芸術心理学者たちのような識者が言うことなのだから、たいていの人は『円』という形は、美しいものであり、力強いものである。」と誤ってしまっている。しかし、自然や事物の中に見られる「円」が、なぜ美しく、力強いのか、形態のもつ秘密を視覚的に明快に説明しているものは少ない。

「円」という形は、周知のように「幾何学」では、一点から等距離のある点の軌跡であると説明されている。机上の学習では、鉛筆などで線や点を描いているが、「幾何学」では可視的なものではないことになっている。点は、概念であって場所を占めるものではない。また、直線は離れている二点を結ぶ最短の距離という概念であって、同様に現実には存在しないものである。

しかし、「円」は美しい形である、昔からいわれているからには、「円」という形態のなかには、人々に美的感情や力強さを訴えかける秘密があるはずなのだ。ただそれを多くの人たちがうろたような視覚的な説明がされていないだけと推察される。

芸術家は、自然の秘密や事物の内部に潜む目に見えない関係やその本質を直感的に見抜く力をもっている存在である。だから、芸術家が探究しようとするその秘密こそが、一般的な能力しか与えられていない私たち見るものの魂を魅了するわけである。

イタリアの芸術家ブルーノ・ムナーリ（一九〇七—一九九八）

は、事物や自然の中のさまざまな神秘を探り出す、そうした天賦の才能があつた人で、また、発見した秘密をいろいろな方法で分かりやすく説き明かしてくれる《秘密の解説者》でもあつた。ここに、『円』という小さな本がある。

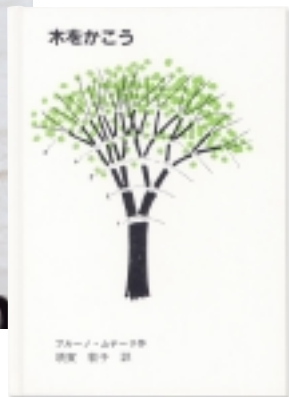
この本は、ムナーリが、身の周りのいろいろな事物から自然の造形物に至るいろいろな事物、あるいは古今東西の記録などの中から、「円」に関連するモチーフを集めた目で見える『円』の『小百科事典』である。文章による説明はできるだけ抑制されていて、見る人が自分のイメージーションを働かせて、意味を読み取るように仕掛けられている。この本を見る人は、あまり説明なしに『円』の力強さや美しさを読み取るべきである。

ここでは一点から等距離にある点の軌跡という不可視で理念的説明ではなく、その力学的な様相を視覚的な材料を通じて具体的な説明をしてくれている。

例えば、一点の写真を例にとってみる。

アフリカの人々が円陣を描いて踊っている。人々が形成しているのは、まさに幾何学でいう中心から等距離にある点の軌跡の形態である。中心に磁場が働き、中心と目に見えない緊張という糸で結ばれていることで、人々が円陣を形成していることがよく分かる。

また、もう一枚では、中央とおぼしきところに物売りか、大道芸人がいて、人々が円陣を成している。なぜ円陣を作ったと並んで



▲ 子どものための造形活動《木をつくろう》を指導する岩崎氏



いるのだろうか。見物人たちは、中央にいる人物と常にいちばん近い距離に位置しようとするから、幾何学でいう「円」を自然に形成する結果となるのである。つまり、中心といちばん密接な関係を保とうとする意思の連鎖が円形を作り出すのである。同じエネルギーを有するものが、中心から等距離で描いた形態が「円」であれば、当然外からの力を反発し、滑らかに運動するのであり、最も美しい形態であることはだれでも分かるのだ。

ムナリーは、このように自然や事物の形態に隠されている法則性を、視覚的な要素を用いて、人に明らかにしてくれるのである。同じように正方形の不可思議を集めた『正方形』という本もある。

もう一つ例を挙げてみよう。ムナリーは、自然そのもののへの深い観察によつて、「木」の生長の法則を見いだしている。彼によれば、「木」は、生長の過程で幹から二本、三本（あるいは三本以上のこともある）と枝分かれしながら大きくなっていくが、枝分かれするとき、枝は幹から遠く、高くなるにつれて、細くなるというものである。「木」を注意深く観察すると、どんな樹木であつても、ほとんどの「木」はムナリーが発見した法則どおりの形になっている。冬に葉っぱが落ちた枯れ木の姿を見れば、だれでも納得するだろう。言われれば、「コロンブスの卵のたとえのように、だれでも「なんだ、そんなことか」と片付けてしまいそうなことである。しかし、普段見慣れている自然を注意深く観察して、このような法則性を引き出すことができるのは、特別な才能を与え

られた《探究者》だけに可能なことだろう。

自然や事物などあらゆることに通じるのであるが、観察することによつて、普段は見落としていることに気がつくようになるものである。それは科学の始まりであり、芸術の始まりでもある。ムナリーの手法は、だれもが気がつかない視点から得た内容をやさしい内容に変えて我々に伝えてくれることに特徴がある。

「木」の生長のこの法則を知れば、大人でも子どもでも、「木を描く」ことは、それ以前に比べれば少しは苦勞には感じるとしても、楽しいものだといつそう感じるようになるだろう。ムナリーは、この「木」の生長の法則の発見を『木をかくろ』（至光社刊）という本にまとめている。ムナリーの獨創性が優れているのは、この法則を、遊びと造形活動に結び付けて、子どものための造形活動《木をつくろう》というユニークなプログラムに発展させているところにある。そういえば、来日した一九八五年に、ムナリーが日本で初めて《木をつくろう》というワークショップを行ったのが、こどもの城の「円形劇場」であつたのも不可思議な縁である。

岩崎清（いわさき きよし）

美術出版社、平凡社などを経て、昭和60年に東京の青山に創設された、「こどもの城」に造形事業部長として入る。子どもの造形活動の指導や、ブルーノ・ムナリー展、フランク・チゼック展の開催を手がける。「21世紀の感性を考える会」代表として毎月「フォーラム」を開催。「日本ブルーノ・ムナリー協会」代表、現在武蔵野美術大学非常勤講師。